

3-12

主題

入居施設と精神科病院との連携事業で多様化する入居者の生活の安定を図る

副題

養護・特養・障害施設職員と病院職員が共に学ぶことで、  
医療と生活を支える職員の意識の変化と寄り添う支援の実践

キーワード 1	事例検討カンファ レンス	キーワード 2	精神疾患	研究(実践)期間	12ヶ月
------------	-----------------	------------	------	----------	------

法人名・事業所名	社福) 多摩養育園 養護老人ホーム竹の里
発表者(職種)	松木涼(支援員)、伊藤愛子(支援員)
共同研究(実践)者	宮入洋子(支援員)

電 話	042-654-4046	FAX	042-654-5028
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	八王子市犬目町の緑豊かな自然環境の中で、昭和 30 年に開設された定員 160 名の養護老人ホームです。環境上または経済的な理由などで自宅での生活が困難となっている方が生活されています。法人は、特養・障害施設・保育事業等も運営しており、施設間や地域の方々との交流にも取り組んでいます。
-------	--

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

近年、入居者の状態像の変化や支援課題の複合化が進んでいる。特に精神疾患の方や重複障害の方、更には何らかの精神疾患を有していると思われるにもかかわらず、未治療で施設に入居してから疾患が発見される方など、精神疾患に関する医療連携の重要度が増している。当法人では「寄り添う支援」を目標に掲げ日々支援を行っているが、こうした変化に伴い、職員が「あなたのために」と行っている支援に対する不安や疑問が多くなってきていた。また、精神科病院からの退院者や受け入れが多くなるにつれ、精神科病院と施設でとらえる「安定」という意味の違いが大きく離れている現状から、退院後の継続した支援に差が生じている状況などの課題が生じていた。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

精神科病院との連携事業を行い、入居者や疾病についてより良く知る(理解する)ことにより、施設職員がこれまで手探りであった入居者支援に対しての不安や疑問への解決の糸口となるだけでなく、多職種連携がもたらす職員の意識改革、アセスメント能力の向上、および相手の思い(痛み)への気づき力の向上につながると考えられる。また、生活の場である施設の職員と治療の場である病院の職員が相互の状況を共有し、連携を強化することで、「安定」が意味する状態の差を小さくし、退院後の支援の一貫性を支え、入居者一人ひとりに寄り添った支援を実現できると考えた。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①各施設における、精神疾患を基にした対応困難を感じた事例について 2~3名選出。
- ②基本情報・詳細な状況・施設での取り組みなどの内容をまとめた事例資料と、検討したいエピソード場面、施設職員のストレス度やアンガーマネジメントの程度も記載した資料を基に、福祉・医療それぞれの専門的立場から意見を出し合い、より良い対処方法を模索していくことを目的とし、事例検討カンファレンス(以下、「カンファレンス」)を開催した。

③平成 30 年 6 月 1 日頃～令和元年 6 月 30 日の期間 2～3 か月に 1 回のペースで精神科病院とカンファレンスを行った。カンファレンス開催日に、事例対象となる施設の見学・ミニ講座・カンファレンスの流れで意見交換をした。ミニ講座は事例に関連した精神疾患理解と対応の方法について精神科病院が行い、精神疾患の知識を深める場とした。

④カンファレンス後は、施設ごとに学んだことを振り返り、参加していない施設職員にも周知できるように内部研修などを実施した。

#### 《4. 取り組みの結果》

連携事業を通じて、頓服の精神薬の使用に関して、不安や疑問を持っていた施設職員は、不安に思った時に少しでも緩和できる可能性があり、入居者の不安を少しでも軽減させることができる事を学んだ。また、認知症等の原疾患に加えて躁うつ病も抱えている入居者の精神状態を把握することで、状態によって声掛けの仕方が変わることや日中の過ごし方の工夫や、眠剤などの薬の調整といった医療的な立場からのアドバイスがもらえ、すぐに実践できることが増えた。周囲の入居者への影響もあるため、環境を変える意味でも個室での生活が望ましいのではと施設職員間でも検討していたが、その方が良いとアドバイスがあり、正しい検討であったと実感することが出来た。また、病院職員が施設見学を行ったことにより、その施設の状況や入居者の生活の様子を知る事で、施設での生活支援と入院中の支援の相違を病院職員に理解してもらうことができた。一方、病院側からの服薬している薬の内容や調整の仕方、環境の整え方など、医療的・専門的立場からのアドバイスが大きく響き、施設職員の気持ちにも変化が現れた。カンファレンスを重ねるごとに互いの連携が進み、病院職員から施設での生活支援に応じたアドバイスをもらうことができるようになり、施設ですぐに実行できるようになった。

#### 《5. 考察、まとめ》

カンファレンスにより入居者を多角的に知る大切さを学ぶことができた。また、精神疾患の理解を通じて、その方の苦しみや辛さを知ることとなった。もし今回の取り組みがなければ、その方の苦しみに気づけないばかりか、自分の支援が果たしてこれでよいのかと、職員の気持ちも混乱したままであったと思われる。多職種で様々な角度からの意見交換の場は、職員に気持ちの変化と気づきをもたらした。病院は治療の場、施設は生活の場であり、それぞれの場で対応の仕方に違いはあるが、入居者や患者に接する際の考え方の「その人を知る」においては、共通することが多かった。病院と施設での連携事業は、お互いを知ることから始まる。これからもプラスの形で変化し続けていき、入居者の苦しみや辛さがわかる支援者となる輪を広げていきたい。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(関係者)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

- ・「精神疾患にかかわる人が最初に読む本」著／西井重超 照林社
- ・厚生労働省 知ることからはじめよう みんなのメンタルヘルス総合サイト  
<https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/data.html> (2019.8.17 閲覧)

#### 《8. 提案と発信》

一人の入居者の人生を支えるという事に対して、施設職員は日々不安や疑問を持ちながら入居者や家族に対して向き合っている。複合課題を抱える入居者の生活支援をすすめるにあたり、多職種連携やチームケアは根幹であり、なかでも医療介護連携は重要な要素となっている。一人の入居者を支えていく事に対して、病院も施設も双方が理解し、協力していく事は、よりよい支援を導き出す一つの糸口になると思われる。